

分科会「聾史入門」

— 光り輝く人びと —

司会・石川俊哉 講師・西滝憲彦

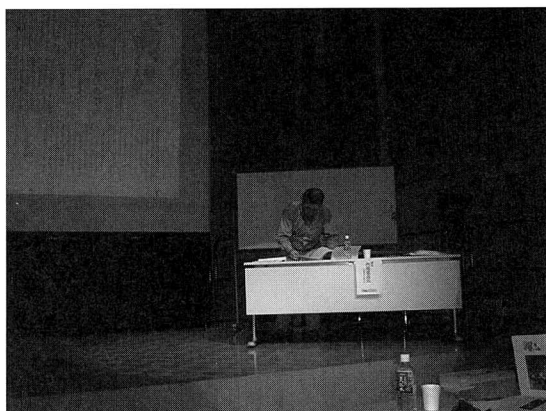
●司会 入門講座初めて受けられる方もいらっしゃると思いますね。申し込んでいただいて有難うございます。西滝さんの公演のテーマが『光り輝く人々』となっております。以前、西滝さんは日聴紙で編集の仕事をしてきた経験があります。本日の講演を楽しみにしたいと思います。申し遅れましたが、私は本日この分科会の司会を担当致します石川と申します。初めてでいろいろ手落ちなどもあるかと思いますが、よろしく願い致します。

●西滝 こんばんは。遠方より来ていただいた方もおられ、有難うございます。先ほど石川さんからご紹介いただきました西滝憲彦と申します。本日私は、入門講座を担当することになりました。聾史とは何なのかというお話をさせていただく予定です。今日の開会式の時に、全日本ろうあ連盟理事長の安藤さんの挨拶を小中さんが代読されましたけれども、その中に「人が時代を創り、人は時代に生きる」という言葉がありました。まさに人が時代を創る話、また時代に生きた本当の話をしたいと思います。

人間の歴史は本当に古いですね。この地球に、この日本に人間がいたのは今から何年前ですか？

1万年、もっと前ですよ。人間の歴史というのは本当に古いけれども、その中のろうあ者の歴史は何年前からかというのと、100年くらいです。なぜ100年かというと皆さんわかっていますよね。聾が初めて集まった所がろう学校。京都のろう学校が出来たのが110年前のことです。それから聾の歴史が始まりました。ですから、まだ浅いです。

私は今から20年くらい前、全日本ろうあ連盟が発行している季刊誌、前の名称は『ろうあ運動』。B5の大きさでした。東京本部の事務所で作って25年前に発行しました。京都では全日本ろうあ連盟が発行している新聞『日聴紙』があり、東京では季刊誌『ろうあ運動』を発行している。しかし職員が忙しくて定期的に出すことができないため、その仕事を京都に移しました。京都は新聞を出していて、書くのも得意ですね。新聞を出し



たあと時間ができるので本を作る、スムーズに仕事が並行してできるだろうと。働いている職員は三人、一人は名前が松島さんという聾の人ですが、皆さんご存知ですか？ 若いときに会社をくびになって裁判で戦って勝った人です。全日本ろうあ連盟は「賢くて力もある」ということで彼に『日聴紙』をお願いしました。もう一人は亡くられていますけれども木村さんという女の方です。健聴で、手話は知らないけれども書くのが得意です。新聞を書いてお金を集める二人。もう一人は若い人で岩淵さんという女の方です。その三人の方がいらっしやいましたが、三人では大変だということで編集委員会をつくりました。編集長が安藤さんです。編集委員が松本弁護士、そして私、あと名前を忘れてしまいましたが、四人でやりました。名前も季刊誌『ろうあ運動』というのは硬くて読むのも大変だし魅力がないということで、本の名前もかわいい名前『MIMI』に変えました。今日売っているかと思います。1年間に四回発行されています。

日本聾史学会が無かった当時、聾の子供のお母さん、またろう学校からいろいろ相談を受けました。ろうあ者で立派な人、健聴の場合だと電気を考えたエジソンのように、ろう者の立派な人を知りたいということで相談を受けたわけです。でもその頃は資料がありませんでした。例えば、ろうあ者の学校長はいるのか？ということでも、今だったら「小岩井さんとか辻本さんとかいます」と名前が言えるのですが、20年前だとわかりません。いろいろ探して長野松本ろう学校の小岩井先生、北海道函館の辻本先生がいるということが分かっています。でも昔は、ろうあ者の良い話を

残した本はありませんでした。記録として残っていません。

『日本聴覚障害者新聞』、あるいは、昔の藤本先生がまとめて作られた『ろうあ年鑑』というぶ厚い本があるんですね。皆さん持っていらっしゃるでしょうか？ 昭和10年くらいに出しました。昔のろうあ者の生活、仕事、文化、芸術などそれに載っています。またフランス、イギリス、ヨーロッパの話も多く載っています。どうしてヨーロッパのことまで載っているのか。例えば文化的な活動、演劇や車座を作って監督をされたり、『もくもく』という本を作られたり。それはろうあ者が書いた小説や詩、または短歌、美術そういうものがいろいろ載っている本です。その本の名前が『もくもく』というのですが、ろうあ者にハッパをかける、ろうあ者も劇ができる、小説が書ける、そういう素晴らしい姿を藤井先生が育てられました。

社会にアピールする仕事をしておられた藤井先生という有名な方がおられます。最後は、残念ながら自殺されてしまったのですが、その藤井先生が市立ろう学校にいらっしゃった時に、ヨーロッパに勉強に行かれて、ろうあ者がとても素晴らしい彫刻を作ったり油絵を描いていることを発見されて、それを本に載せられました。藤井先生はいつも「立て、ろうあ者、立て」というふうに言ってらっしゃいました。そういう先生とか藤本先生がまとめられた『ろうあ年鑑』という本が昔はありました。今はありません。持っている人はとても羨ましがられますね。

70年前というのはこのような状態で、ろうあ者の成功例といったまとめた本はありませんでした。私が編集委員ということもありまして、『MIMI』の“光り輝く人々”にろうあ者で立派な人を見つけて文章に書いて発表することになりました。ろうあ者の歴史ではなくて、素晴らしいろうあ者を紹介するという目的で書きました。

例えば、先ほどここで発表があった杉山杉風さん、この方は俳人として有名で松尾芭蕉の弟子でした。一緒に歩いて東北地方に旅をされて俳句を書かれた人です。私は歴史を詳しく調べるということを、これを書いたときにはあまり考えてはいませんでした。杉山杉風の祖先が石田三成ということを知って、とてもびっくりしました。そ

れはやはり歴史の研究の仕事ですね。今日の発表を聞いて素晴らしいと思いました。私は、昔ろう者だけと松尾芭蕉と一緒に俳句をつくった方がいた、江戸時代にそういう方がいらっしゃったということは思わなかったんですね。難聴、耳が遠いくらいかなとも思いますが、杉山の本を読むと確かに耳が悪いと書いてあります。ろうあ者でも俳句を書く有名な方がいらっしゃるということで取り上げました。

もっと素晴らしいのは村上鬼城さんという方、皆さんご存知ですか？ 大正くらい、昭和のはじめくらいに生きていらっしゃった方はご存知だと思います。小林一茶という分かりやすい俳句を書いていたのですが、“雀の子、そこのけそこのけ、お馬が通る”“やせ蛙、負けるな一茶ここにあり”。小林は江戸時代の俳人ですね。ろう者の村上の俳句も同じです。子供でも分かる俳句を書かれた方です。

なんというか、非常に自然、例えば木や花、緑、風そういう自然を素直に受け止めて俳句に書かれています。とても読みやすく、味がある俳句を書かれた方です。「昭和の一茶」という名前がついた方です。でも皆さんは、村上がろう者だとは思っていないですよ。村上本人も年をとってから「自分がつんぼだ」と言っています。だから俳句の中にも「つんぼ酒」という言葉が出てくるのです。本当は、村上は子供の時に聞こえなくなったのでコミュニケーションができない分、俳句の勉強に時間をつぎ込んだ有名な方です。本職は代書屋さんでした。人に頼まれて代わりに書を書く。今で言えば司法書士みたいな仕事になりますが、聞こえないけれども社会的な仕事をして、良い俳句を作って発表し有名になりました。

しかし、周りの人は彼が聞こえないということを知らなかったのです。村上さんはろうですが、俳人としては人気がありたくさんの弟子を教えました。群馬の高崎に「村上を讃える会」というのがあり、村上さんのことを調べるために資料をくださいましたけれども、「讃える会」も村上さんが聞こえないということを知らないんですね。健聴だと思っていたんです。

村上さん本人はつんぼと言っていたので、まだまだうまくかみあっていない部分があります。聾

でありながら俳句ができるということが、一般の方にはなかなか理解できなかつたのかなと思います。絶対に聾ではないというイメージ、逆に言えば聾は「下」、健聴は「上」という感覚があるようなので、聞こえないというのはなかなか認められないということですね。

次に阿波野青畝さんという方も有名な俳人です。阿波野さんの場合は、聞こえないこともあって引きこもりみたいな、そういう感じの俳句が多いですね。村上は明るい、阿波野は暗いというか、聾だからこのように書いたかなという研究をしてほしいと思います。

20年前の私の出発点は、ろうで素晴らしい人がいるということを知らせるという役割を持っていたということですね。調べる方法ですね。どこにろう者がいるかわからないので、分担を決めます。

例えばろう教育。世界の場合はどうか。世界のろう教育の発展を調べるわけです。調べる方法は、私はろう教育には手話が必要だと思っています。皆さんも同じだと思いますが、手話の教育がどこからスタートしたのか、それは皆さんも勉強されたかと思います。フランスのパリでド・レペが初めて聾の子供を集めて教えました。それからシカール先生が手話の形の整理をして子供たちに教えて、子供たちが手話でおしゃべりをしたり、手話で勉強したり、手話の技術を身につけ、その中で優秀な生徒を、例えばローレンツ・クラークという人がいます。

この人は、昔シカール先生がどんな方法でろう教育を社会にPRをしたか、シカール先生は、クラーク、あるいはジャンマッシューという優秀な子供を連れて行き、イギリスで公開授業をします。シカール先生が、みんなが見ている前でクラークに、「ろう教育とは何なのか」「人間は何のために生きているのか」の質問をします。クラークは、その質問にすぐ答えることができました。答える方法は、紙(黒板)に書くのと手話。先生と生徒が模擬授業をする。イギリスやヨーロッパ、文部省、大学の先生などの教育関係者、ろうの子供を持つ親がアメリカからも来ていました。

その模擬授業を見て、「素晴らしい。うちの娘はろうで教育は難しいと思っていたけど、今の授業を見て健聴者並みに手話でコミュニケーション

ができる。これだ。うちの所にもろう学校をつくりたい」という気持ちを、模擬授業を見ていた人は持たれたわけです。

その中にアメリカから来ていた男性がいて、名前をギャロドットさん。彼が見て、「アメリカにこれは必要だ」ということで、ギャロドットさんはローレンツ・クラークをアメリカに連れていくんです。ローレンツ・クラークはスウェーデンの人で、ギャロドットはアメリカですね。クラークをアメリカに連れて行って、「自分の娘を教えてほしい。ろう学校をつくりたい」と頼むわけです。その時、クラークは20歳を過ぎたばかりでしたが、ギャロドットにお願いされたわけです。クラークは決心してギャロドットと一緒にアメリカに行ったのです。クラークはアメリカでギャロドットろう学校の先生をし、ろうあ協会をつくる。ローレンツ・クラークは、「アメリカのろう教育の父。アメリカのろうあ者の父」と立派に讃えられています。

この話は、今日は売られていませんが、全日本ろうあ連盟が発行している『誇りある生活をもとめて』という本に載っています。クラークの人生。それは、シカール先生に教えられて手話を覚えて賢くなって、ヨーロッパで模擬授業のドサまわりをし力をつけて、最後にはギャロドットに頼まれてアメリカに行って、そのまま亡くなるまでアメリカで過ごした。何か夢のある話ですけども、結局、アメリカのろう教育は、フランスから移ったということですね。同じように、マルムという人も同様にシカール先生から教えられて成長し、スウェーデンで初めてろう学校を作りました。ろうあ者がろう学校を作ったわけです。フィンランドも同じですね。つまり教え子たちが大きくなってあちこちに行き、頑張っているわけです。今の世界のろう教育の基なんです。

そういうことを調べる方法は、図書館に通って、世界のろう教育の資料、ろうあ者なのか、誰なのか、どこの話なのか、先生は誰なのか、少しずつそれらをつなげていって少しずつわかってきたことなんです。「光り輝く人々」の資料の中のことも、研究というよりも謎解きみたいな楽しい作業でした。

でもみんなが同じではなくて、ロシアのろう教育の父と言われているアルノルドさん。アルノル

ドは手話を知らなくて口話でしたね。アルノルドが教えてもらった学校が、ドイツのろう学校だったわけです。フランスのろう学校とは考え方が違います。フランスは手話、ドイツは口話です。フランスは手話が普及しました。ドイツは口話ですね。世界的にも、手話の流れ、口話の流れと二つに分かれていたわけですね。

これがやはり日本でも同じように、大阪市立ろう学校は手話、他の例えば、西川はま子さんのお父さんが口話を一生懸命されていました。先ほど発表があった鳩山一郎さん、口話ですね。こういうように、ろう教育も実はろうあ者からスタートしているということを聞こえる人が知ってほしかったと思います。本には、「健聴の先生はやはり力が強いが、ろうの先生でももっと頑張っしてほしい」という気持ちを込めて書きました。

世界の先生の話は終わりましたので、今度は日本の先生のことを取り上げたいと思います。小岩井先生と辻本先生の二人の校長を見つけました。

このお二人を探していると共通の場所、例えば今はありませんが、二人とも「東京盲啞学校」、昔の「東京教育大学付属ろう学校」「市川ろう学校」ですが、今は「つくば」になります。そこで二人は一緒でした。小岩井先生のごことは、司会の石川さんも研究して素晴らしいものを出しておられますが、これは20年前のことで探す資料がなくて、小岩井先生に関する資料も非常に少なかったんですね。名前が載っているものはあります。

例えば、『日本聴力障害者新聞』に名前が出るとかはありますが、本当の姿というものはなかなか前は分からなかったんですね。今は、石川さんがいろんな資料を集めてまとめておられますので、僕は分かることだけ書いています。どちらの先生も勉強がとてよく出来て成績がとてよ良かったので、「東京盲啞学校に残ってほしい」ということで、卒業したあともそのまま続けて勉強しました。そして教える経験を積み重ね、自分の生まれた長野や北海道に帰っていきました。

小岩井先生は長野のろうあ協会の会長でした。長野ろうあ協会の会長をしてらしたので、全日本ろうあ連盟を再建するときに来ていただいて名前が載っています。だから、とてよ親しみを感じます。辻本先生は、25年間という長い間校長をさ

れて、初めは私立であった小さなろう学校、奥さんは健聴の方でしたが、一緒にろうの子どもを集めて、小さな教室からスタートしました。

そして徐々に、村、又は町からいろいろ注目されて、北海道立まで大きくなり、辻本先生はずっとそのまま校長を続けていらっしやいました。手話についてはあまりうまくないという話ですけども、これはいつ頃かな？ 1930年くらいの話ですが、今から80年も前の話になりますね。ろうあ運動もまだない時代で、一般の理解もあまりない時に、小岩井さんや辻本さんがろうの子どもを教えるためにとてよ頑張っけていらっしやったのは、とてよ素晴らしいことだと思います。これから本題に入りたいと思いますが、皆さんもお疲れだと思つので10分間休憩をします。

(休憩)

皆さん、松本竣介さんをご存知ですか。油絵を描く画家です。A4半分くらいの絵がいくらだと思つますか？ 1億円になります。本当に小さな絵が高いんですね。本当に高くて買えない額です。時々「松本の絵が見つかった」とか「松本の絵が盗まれた」「松本の絵が安くなった」とか名前が新聞に載るのですが、本当に絵としては高い価値があります。ろうの中でいちばん高い絵を描く人だと思つます。今は亡くなつていらっしやいません。

36歳で亡くなりました。僕は10月8日が誕生日なんですけど、赤い帽子をかぶつて赤いちゃんちゃんこを着なくてはならない60歳になります。仕事は3月に定年になり、それを楽しみに待つているんですけど、僕が学生の時に松本がろう者であることが分かりました。松本のことを、いろいろ調べていました。例えば、神奈川の国立美術館で松本竣介の展覧会があるとそこに行きます。見てみると不思議ですが、涙が出てきます。また松本竣介展があると聞くと、また見に行くくらい夢中になっています。なぜそんなに夢中になるかという、絵はあとから説明しますが、生き方もなかなか真似することができないんですね。

どんな生き方をしたのかという、松本は昭和13年生まれです。日本・ドイツ・イタリアの三カ国の軍事同盟、中国を侵略するために同盟を組んだ年なんです。日本は馬鹿な時代という、国民がそういうことを知らずに、正義の戦争という宣

伝を見て国民は喜んで兵隊に行くのを、喜び応援していたという時代ですね。

その時代に生まれて、6歳の時に高熱が出る脳膜炎という病気にかかり失聴したんですね。6歳まで聞こえていましたので、言葉は話せます。松本のお父さんは息子が失聴してろう者になった時に、まず友達と話ができるかどうか心配しました。

松本の家は中流階級でしたが、息子のために、例えばカメラを買い与えて友達を写すなどして、友達と仲良くする方法を考えました。その一つに、油絵用の道具、チューブを買い与えて、松本は小さい時から楽しんで絵を描いていました。また文を書くのも好きでした。聞こえないということで、少しさみしい、自分だけの世界だけ。例えば、文を書く、詩を書く、絵を描くというようなそういう育ち方をしました。松本の有名な絵はこのスクリーンくらいの大きさです。しっかり地面に立っている、「立てる像」という名の絵です。この絵を見たら分かるように、自分が見ても松本という人は、「しっかり頑張っている」という意味ではなくて「自分がここにいる」という気持ち、それを強く表している絵です。

松本は大きくなって東京に一人で絵の勉強に行き、たくさん絵を描きます。とても味のある絵で、他の人とは少し感じが違う、とても引き込まれる、静かだけれどもとても引き込まれる、強さがある絵を描かれる方です。周りの評価も良いということで、いろんな本に載り有名になっていきます。松本は24歳くらいの時に結婚をします。奥さんは健聴の方です。奥さんは今も生きていらっしゃって、90歳くらいですね。僕は奥さんに話しが聞きたくて、東京の家に電話をしてもらいましたが、奥さんは「高齢なので話すのは難しい」と断られました。奥さんは、良い会社の社長の娘さんでお美しい方でもあり、結婚をされて本を発行する仕事を二人でやりました。文芸春秋みたいな雑誌を、毎月作って発行する仕事を夫婦でされていました。

その頃、戦争が始まり、絵を描くことは贅沢だからと、赤い腕章をした憲兵みたいな方が絵や絵の具を没収していくなど、画家に自由がない時代でした。とても暗い時代ですね。松本は自分で出している本に、軍隊はだめだ、戦争はだめだとい

うことを書いています。

そういうことを書くと捕まったり、殺されるくらいのことなのですが、松本は立ち上がって「軍隊はめちゃくちゃ、芸術の自由を奪われた」という内容を書いて本を出します。その本を読んだ周りの人はとてもびっくりしていましたが、松本は「絵も素晴らしい、文も素晴らしい、考え方も素晴らしい、しっかりしている」ということで、ますます人気を得ることになります。

松本はろうであるけれど、自分の考えを出す方法は二つあって、一つは絵を描く、もう一つは文章を書く。妻と一緒に本を発行していましたが、残念ながら本はなかなか売れなかったんですね。本の仕事もつぶれてしまい、本をまた発行するのはむずかしいということになりました。この絵は、兵隊が街で立っている絵です。兵隊が立っている中にきれいな女性が歩いているという絵なんです。見て分かる通り、街では兵隊がいばっている、女性は暗い気持ちで歩いているということを表した絵です。

このように、自分の考えを絵で表現した方です。ですから一般社会では松本のことを、「抵抗の画家」という名前をつけました。でも、松本はろう学校の経験もなく、友達も聞こえる人たちばかりです。お喋りは筆談で、仕方のないことですが手話は全く知りません。でも、手話で話をする友達がいない代わりに本を書いて出す。先ほど説明しましたが、「議事堂のある風景」の絵はルンペンがいます。とにかく、立派な国会議事堂も役に立たない、貧しい人間がいる。暗い国の感じの絵ですね。

戦争が終わっても松本は捕まりませんでした。戦争が終わったあと松本がまずやったことというのは、日本にいる健聴の画家や社会とかマスコミみんなに対してアピールをしました。何をアピールしたかということ、「戦争が終わって画家はみんな貧しくて生活が苦しい。だから、画家は手をつないで一緒に「画家の会」をつくりましょう」と呼びかけました。

例えていえば、戦争が終わってろうあ者の先輩が全国のろうあ者に呼びかけて「全日本ろうあ連盟の再建をしましょう」と呼びかけるのと同じように、松本は画家の中心的な存在だったわけです。

ろうあ者でそこまで積極的に前向きに生きる、とても素晴らしいと思います。特に戦争中は軍隊が悪いくらいということをはっきりと出した。それほどの勇気を持って生きたというのは、ちょっと考えにくいことですね。なぜかというと、戦争中、画家は戦争に賛成する絵を書きます。戦争で頑張る兵隊の姿とかの絵を描くのが仕事でした。

反対する絵を描くのが難しいときにそれが出来たのはなぜかという、松本の心は水晶のように透明で汚れないきれいな心だったんですね。奥さんは慶応大学の先生の娘でした。羽仁素子、自由学園で勉強をして羽仁さんの助手をしていた賢い人です。

とにかく私が言いたかったことは、松本はろうで、手話は知らない。6歳で失聴してろう学校の経験はないけれども、生き方は今お話したとおりで、皆さんに知っていただきたいと思います。皆さんも松本竣介という展覧会があれば見てください。また本屋に松本画集もありますので、絵に関心も持っていただきたいと思います。松本の絵がたくさん飾られているのが、群馬の桐生にある大川美術館です。そこの館長が、松本の絵ばかりを集めて展示しています。私は松本の絵に会いたくて何回も通いました。それくらいに本当に夢中になれる絵ですね。松本の話はこれで終わりにしたいと思います。

次に、大原先生の話をしたと思います。私は絵を見るのが趣味なんです。大原先生の絵を見た人はいらっしゃいますか。先生の絵もなんていうか、一本道というか、描くのは自分の顔、自画像ばかりです。ちょっと珍しいですけども、鏡で自分の顔を見て描く。松本は自分の顔は描かなかったんですが、大原は自分の顔を描くわけです。絵の味は違いますが、大原さんも6歳くらいで失聴しました。大原さんが入ったのはろう学校で、手話を覚えて友達もつくり賢く勉強もできました。

卒業後、大学に入り、その後、自分のいた学校に先生で採用されて、ろうあ者の世界の中で生きた人です。松本は6歳で失聴しましたが、健聴者がいる世界で、手話ではなく筆談でコミュニケーションを取る。このように、二人の道は違ったものになりました。道が違うから描かれる絵の味も違うと思いますが、松本は戦争に反対した。大原

さんは子どもを教え、22、23歳の頃に、ちょうど全日本ろうあ連盟が再建され、いろんな事を訴えました。いろいろな事も言われましたが、ろうあ者が運転免許を取れるように、そしてろうあ者も平等になるようにと「法律改正」、これをいつも出しておられました。

その頃のろうあ連盟は、再建されたばかりで、まだ政府に対して交渉するという力はなく、メンバーも昔の流れというか、お願い運動に関わってきた人、聞こえる人からかわいがってもらうことが良いという考え方の人が中心でした。そういう中で大原先生は、青年的な行動で頑張っていました。全日本ろうあ連盟のお金が足りなくて運動にも壁がある、そういう時にどうすればよいのか、どうやってお金をつくれればよいのかということで、手話の本を発行しようと思いつきます。『わたしたちの手話』という本がありますよね。「はにわ」の表紙だったと思います。初めて出したのは昭和44年です。大原先生と神奈川の大槻さん、大阪の大崎さん。この三人が中心となり、大崎さんが責任者でした。大原さんが絵を描く担当で、大槻さんが編集を担当されていました。ちょうどその頃、大原先生は結核で入院されました。大原先生が入院中にベッドの上で、「手の動きが言葉に合うかどうか」の絵のチェックをされました。全日本ろうあ連盟の運動も関わってこられた人ですね。

最後ですが、城孝子さんという方をご存知ですか。ご存知ないと思いますが、もう亡くられています。僕の先生です。僕だけではなくて、ろうあ運動、権利の考え方、差別がないという考え方が今は当たり前ですけども、昔はまだ差別という考え方がありました。彼女は大阪の生野ろう学校を卒業して、それから大学の試験を受けました。兵庫県にある武庫川女子大学に入りたくて試験を受けました。しかし、ろうという理由で断られました。いくつか大学から断られて、最後に奈良の天理大学に入学を認められて、ろう学校を卒業して入ったという方です。その経験から彼女は、社会に矛盾があるということ、健聴者とろう者に差別があり、自分がろうだから大学の入学を断られたという経験から、差別はいけない、差別をなくそう、差別の撤廃ということが必要という考え方を持ちました。例えば、地域によってはいろいろな

差別をなくす解放運動というのを始めました。

その考え方で、若いうちでいちばん影響を受けた人。もう亡くなられていて皆さんご存知ないかもしれませんが、全日本ろうあ連盟の教育部長であった遠藤さんという方がいらっしゃいます。大阪の会長の清田さんとかも影響を受けて、かわいがられるというのではなくて、ろうあ者も人間として対等な立場で差別をなくすために頑張るといことで、お願いではなくて、ろうあ者には手話通訳が必要であるなど、堂々と要求をしていくという運動に変わっていきました。そのきっかけには、城孝子さんの影響がありました。

『未完の問い』という本が発行されました。その本は今ではもうありませんが、持っている方はとても幸せだと思います。前書きには、もう亡くなられた全通研委員長の伊東先生のことばが載っています。彼女は27歳の時に、結婚式の3、4日前に突然亡くなってしまったのです。自分の家でお風呂に入ったあと、練炭中毒、一酸化炭素中毒で亡くなりました。彼女は亡くなったけれども、一ヶ月後に初めて京都で、全国の青年が集まって全青研が開かれました。そこには彼女も参加する予定だったんですが、参加する前に亡くなられてしまいました。大会に城さんが来られない、みんなはとても悔しいという思いを持ちながら、頑張ってその大会を成功させました。それから新しいろうあ運動がスタートしました。

この第一回目の全青研というのは「差別青研」という名前がついています。今の全日本ろうあ連盟の幹部、昔、若かった人たちです。日本でいえば、ろう者のジャンヌダルクといわれる方です。

何人か光り輝く人々をご紹介します。でも本当は、僕としては光り輝いているけれども、皆さんにとっては知らない方ばかりですよ。紹介することで光り輝くようにしたいと思っていますが、『MIMI』の読者は現在5,000人。北信越ろうあ連盟連盟長の北野さんも、『MIMI』のことを今日の大会誌に書いていただいています。日本聾史学会でいろんな人を掘り出して光り輝く人をもっと見つけてほしいなと思います。安藤さんの「人間は時代を創り、人間は時代を生きる」という言葉がありました、良い言葉だなと思いました。すべて時代を創った人だと思っています。皆さんも今

の時代を創っていますよね。これから光り輝くようになれば良いな、素晴らしいなと思っています。一緒に頑張ることで、私の講演は終わりたいと思います。

■質問

●司会 講演を聞いて、「なるほど」と思ったことや共感したこと、研究心が盛り上がりしてきたのかなと思いますが、質問のある方はどうぞ。

●黒沢（富山） 一つめは、「つんぼ」は差別用語だと思うの、やめたほうが良いですね。二つめは、手話が禁止ということでろうの校長先生がやめたのですか？ 三番めは、口話と手話の論争について詳しく知りたい。

●西滝 「つんぼ」のことですが、私が言ったのは村上鬼城さんの「つんぼ酒」のことです。

辻本先生は、長い間校長を務められていました。でも、手話が禁止だから校長をおりたわけではありません。辻本先生は口話教育をした先生です。自分の力だけでは、大きくなったろう学校での経営は大変です。以前、奥さんは協力してくれましたが、公立に変わりました。いろんな面で指導も受けました。いろいろあって、自分がろうということ、そして年齢のこともありますし、校長を降りたわけです。小岩井先生は、平気で手話を教えるし、長野の松本のろうあ協会もつくりました。手話を禁止ということに、あまり影響を受けていません。

先ほどの質問にあった口話と手話の戦いです。何かというと、先ほど言いました大阪市立ろう学校の方法は手話で教育をする方法ですね。ですから、その頃「手話は禁止、口話が必要なんだ」という文書が出て、それに抵抗していました。車座というろうあ者の劇団を創りました。「父帰る、父帰る」という有名な劇を見せました。

その見せる場所も、大阪の大きな建物、劇場、たくさんお客さんに来てもらって「父帰る、父帰る」という手話劇をし、みんなそれを見て感動し「手話は素晴らしい、必要なんだ」という考えを持ってもらって帰ってもらおう。そういう取り組み、あるいは、手話だけではなくて文にも強くなるために、『もくもく』という大阪市立ろう学校のろうの先生が中心になって、小説とか文芸などを載

せた冊子を発行しました。

大阪市ろう学校は「手話も文も得意、両方出来る。文部省が手話はだめだと言うのはおかしい」ということで争ったわけです。この話は、山本おさむさんが書かれた漫画『わが指のオーケストラ』に詳しく内容が載っています。

●亀田（広島） 先ほどの話の中の「光り輝く人びと」の資料は残っていますか？ それと松本さんの話で非国民の話がありました、絵を燃やされることなど制裁はあったのでしょうか？

●西滝 季刊誌『MIMI』に書き続けた内容です。広島の協会にあると思います。余っているかと思ひますし、今連盟でも一掃セール中で値引きで100円で販売しています。載っているバックナンバーを聞いて選んで、100円を払って読んでいただきたいと思ひます。欲しい人には今日の資料をコピーして渡しても構いません。

二つめの質問ですが、松本さんは非国民として戦争に反対して本を出しましたね。画家が書く絵や文章の本に、『みずゑ』がありました。戦争に反対という文を載せて、みんなはそれを読んで驚きましたが、無事に殺されることもなく捕まることもありませんでした。また絵も残りました。ろうあ者だからかどうかは分かりません。その頃、戦争に反対した労働者の団体、組合が捕まって、リンチみたいなのもありましたが、芸術家は仕方がないという感じがあったのか。昔のことで、私には捕まる、捕まらないの区別は分かりません。松本は軍隊に反対することを出しているのに、捕まらなかったことは良かったと思ひます。捕まっていたら死んでいたかもしれない。絵は残っていますので、先ほど言いましたが、群馬県桐生市の大川美術館とか神奈川の国立の美術館、または本屋にも松本竣介の本がたくさんありますので、読んでいただければと思ひます。

●小島（愛知聾史倶楽部） 私の父はろうで、生まれは北海道です。今は愛知に住んでいます。愛知聾史クラブのメンバーです。父が「光り輝く人々」を読んでおり、話を聞いていましたが、シリーズ化して新たに発行する予定はありますか？

●西滝 お父さんが読んでいたというのを聞いて、とても嬉しく思ひます。本当は途中で終わっているんですね。協会の仕事も兼ねていたりして資料

も探すのが大変で、ずっとお休み状態なんですね。もう一度続けたいとは思ひています。日本聾史学会ができていますよね。もっと素晴らしい内容で発表したいということもあるでしょうから、今まで書いたものをまとめて本にして出したいと思ひています。でもいつになるかはわかりません。他にも書いたものもありますので、そういうものもプラスして出したいとは思ひています。

●石川 質問はこれで終わりたいと思ひます。

